

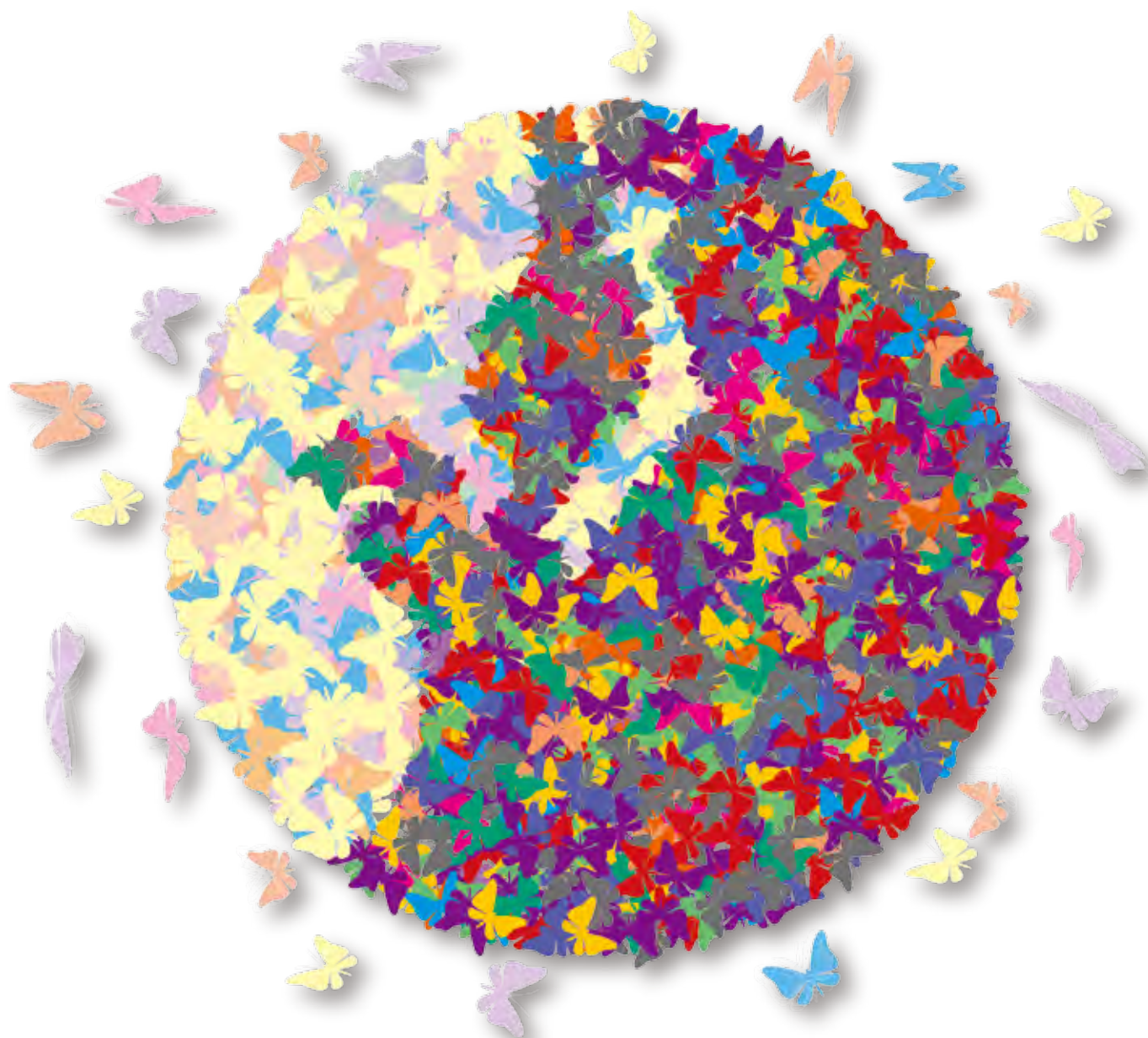
サイエンスとあなたのコミュニケーション広場

science agora 2009

地球の未来 日本からの提案 II



サイエンスアゴラ 2009



開催報告書

写真で振り返るサイエンスアゴラ2009

science agora 2009

開幕セッション 10月31日(土)

ジャズシンガー・Ketty-Kさんによるミニコンサートからはじまり、「ポスターデザインアワード」「エッセイコンテスト」の表彰、出展者による自己アピールなど、オープニングにふさわしく人と人を繋ぐアットホームな開幕セッションとなりました。



これまでの開催で最大規模となったサイエンスアゴラ2009。前回以上に多彩なイベントが行われました。

話す

サイエンスカフェ、ワークショップなど



A42 語り場 ～新たなひろがりをもとめて～
(科博SC養成講座×未来館SC研修プログラム)



C14 生き物の楽しさを語ろう
—生物多様性の入り口
(NPO法人日本サイエンスサービス(NSS))



A27 なるほどエコトーク! 「地球を感じるもうひとつの空の旅」(国立環境研究所)



A4 細胞から宇宙まで! ～1周するとわかる理研の歴史と最新の研究内容～
(独立行政法人理化学研究所(理研))



A21 自然放射線の飛跡を見てみよう!
(有限会社ラド)

体験

実験・工作教室、体験展示など



A1 シルク・ド・さいえんすII
(科学技術広報研究会(JACST))



A6 デジタル4次元地球儀ダジック・アース
(京都大学大学院理学研究科太陽惑星系電磁気学講座ダジック・グループ)

聞く

講演会、報告会など



A45 作家トーク「理系のエンターテインメント」
(サイエンスアゴラ実行委員会)



A20 サイエンス・プレゼンテーション2009「ワークショップ」(日本科学未来館、科学教育フォーラム実行委員会)



A5 Art, Brain & Communication!
—芸術と科学の接点—
(東京大学科学技術インタープリター養成プログラム)

見る

ポスター、映像、ショーなど



A3 ノーベルかがくショー
(日本科学未来館ボランティア「ノーベル隊」)



A19 サイエンス・プレゼンテーション2009「科学の鉄人」
(科学教育フォーラム実行委員会)

総括セッション 11月3日(火・祝)

サイエンスイベントのあり方を振り返り、科学リテラシーの共有を図るためには何をすべきかを論じ合いました。最後に、その一つのヒントになるかもしれない「星つむぎの歌」を会場みんなで合唱しました。



サイエンスアゴラ 2009 開催概要

science adora 2009

日程：2009年10月31日(土)～11月3日(火・祝)

会場：国際研究交流大学村

(東京国際交流館、日本科学未来館、
産業技術総合研究所臨海副都心センター)

テーマ：地球の未来 日本からの提案Ⅱ

主催：独立行政法人科学技術振興機構

共催：日本学術会議、国際研究交流大学村

後援：文部科学省、農林水産省、独立行政法人国立科学博物館、独立行政法人日本学術振興会、独立行政法人理化学研究所、独立行政法人宇宙航空研究開発機構、大学共同利用機関法人自然科学研究機構国立天文台、財団法人日本科学技術振興財団 科学技術館、ブリティッシュ・カウンシル、東京都教育委員会、全国中学校理科教育研究会、日本大学芸術学部

参加費：無料(一部の企画で材料費等の実費を徴収)



参加者数

計 8705 人

10月30日(土)	2054人
11月1日(日)	2454人
11月2日(月)	1829人
11月3日(火・祝)	2368人

※各日の参加者バッジの配布数にもとづきます。

出展プログラム数

計 147 プログラム

話す	サイエンスカフェ、ワークショップなど	35
体験	実験・工作教室、体験展示など	13
聞く	講演会、報告会など	27
見る	ポスター、映像、ショーなど	63
	上記の複合型	9

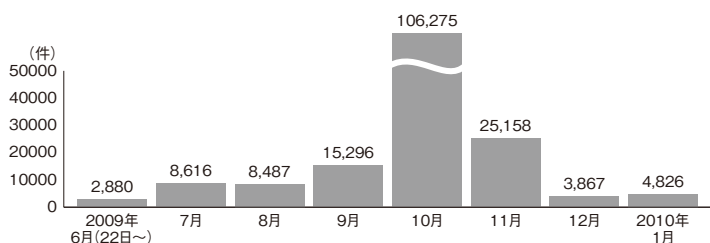
※開催内容に基づき事務局で分類しました。

出展者の所属による分類

計 141 団体

任意団体(NPO法人を含む)	42 団体
企業	9 団体
科学館	6 団体
学校教育・研究機関	65 団体
その他公的機関	19 団体

公式ホームページのアクセス数



サイエンスアゴラとは

現代社会は科学技術から多大な恩恵を受けています。それなのに、理科離れ、科学離れが叫ばれ、科学技術は難しい、とつきにくい、専門家にまかせておけばよいといった声をよく聞きます。しかし、安全安心で持続可能な社会を実現する上で、科学技術の活用は不可欠です。社会全体として科学技術をうまく活用するためには、1人でも多くの人が、科学技術との付き合い方に関心を向ける必要があります。そこで、様々な立場の人たちと科学技術を話題にコミュニケーションし合うことで科学技術がもっと身近な文化になれば、社会全体の意識も高まるのではないかという理念が登場しました。そのような活動理念が科学コミュニケーションです。2006年に始まったサイエンスアゴラは、科学コミュニケーションを実践する場として、専門家はもちろん、あらゆる立場の人が参加するイベントを目指し、多彩なセッションを用意してきました。(アゴラとはギリシャ語で「広場」という意味です)

サイエンスアゴラ実行委員会

委員長：永山國昭(JST 科学コミュニケーション進事業統括、岡崎統合バイオサイエンスセンター 教授)

委員：縣秀彦(大学共同利用機関法人自然科学研究機構国立天文台 天文情報センター 准教授)、上田昌文(NPO法人市民科学研究室 代表)、岡部和彦(独立行政法人産業技術総合研究所臨海副都心センター 産学官連携推進部門 審議役)、喜納厚介(パナソニック株式会社 パナソニックセンター東京 リススピーア 館長)、木村政司(日本大学芸術学部 教授)、小中元秀(日本科学未来館 副館長)、中村日出夫(宇宙航空研究開発機構 宇宙教育センター長)、美馬のゆり(公立はこだて未来大学 教授)、山口慶子(株式会社電通クリエイティブX クリエーティブディレクター)

〈サイエンスアゴラ企画分科会委員〉

主査：木村政司

委員：永山國昭、縣秀彦、岡田小枝子(独立行政法人理化学研究所)、長神風二(東北大学)、中山瑠衣(国立科学博物館)、松本浄(NPO法人シブヤ大学)

〈サイエンスアゴラ事務局〉

独立行政法人科学技術振興機構 科学ネットワーク部

※所属は2009年4月時点



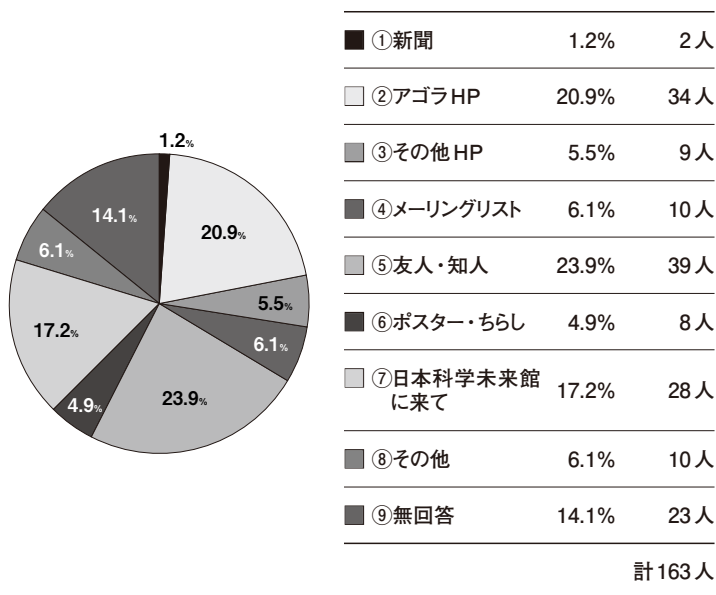
来場者アンケート

会場で回収した来場者アンケートについて、結果の一部をご紹介します。

- 調査日 10月31日(土)～11月3日(火・祝)
- 回答数 158人
- 回答者 性別 男性105人(67%)、女性43人(27%)、無回答10人(6%)
 年齢 10代22人(14%)、20代31人(20%)、30代31人(20%)、40代32人(20%)、50代21人(13%)、60才以上13人(8%)、無回答8人(5%)
 住所 東京61人(39%)、神奈川27人(17%)、埼玉17人(11%)、千葉14人(9%)、茨城10人(6%)、その他10人(6%)、無回答19人(12%)
 職業 会社員28人(18%)、学生(大学生・大学院生等)28人(18%)、公務員・教員21人(13%)、児童・生徒11人(7%)、自営7人(4%)、無職7人(4%)、研究職等6人(4%)、主婦5人(3%)、その他14人(9%)、無回答31人(20%)

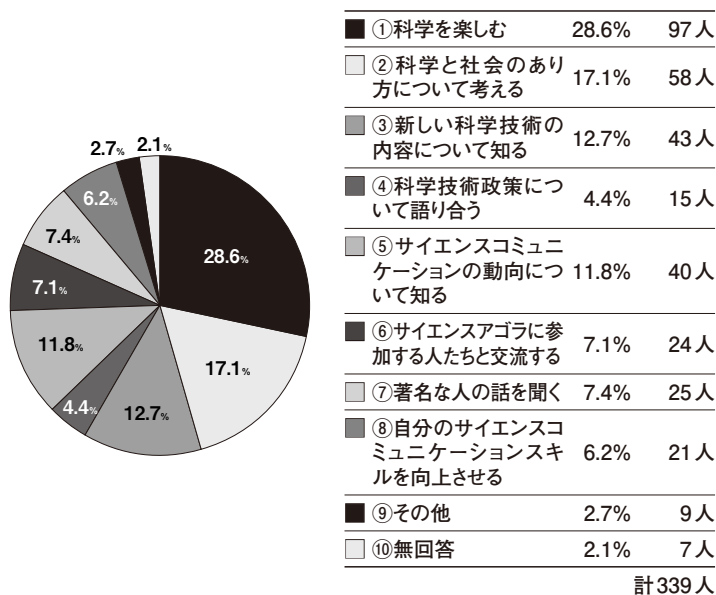
サイエンスアゴラを知ったきっかけ 01

「サイエンスアゴラ」をどこで知りましたか？(複数回答可)



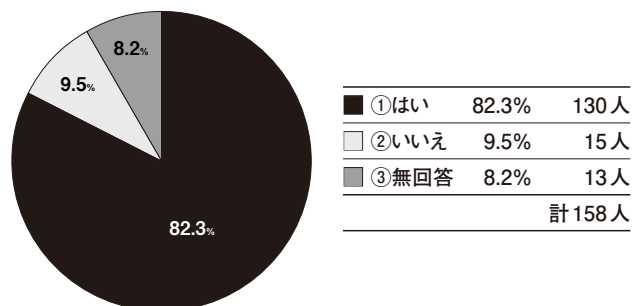
参加目的 02

サイエンスアゴラに何を期待して参加されましたか。(複数回答可)



参加した満足度 03

サイエンスアゴラに参加して、新しい発見や感動はありましたか。

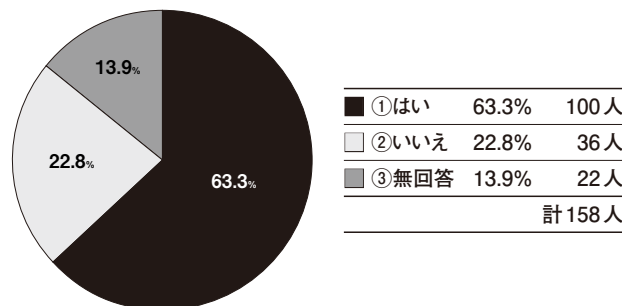


「はい」と回答した方の理由(自由記述、抜粋)

実験の楽しさ、科学の楽しさ／サイエンスコミュニケーションの手法／科学を目の前にすると素直になれる／燃料電池車のすごさに感動した／サイエンスカフェの動向／ふつう知りえない情報が直接聴けたこと／科学技術の応用の広さがよくわかった／身近な所に科学があるということ／他の国の科学技術政策がわかり日本も遅れてはいけないと思った／今後の理科授業の参考になった／サイエンスがごく身近なところで大切なたらしきをしていること／市民と研究者の意識のずれの確認／サイエンスコミュニケーションを仕事とする社会ができていくことを知りました

科学と社会のつながりについて 04

アゴラは科学と社会の関係について考えるきっかけとなりましたか。



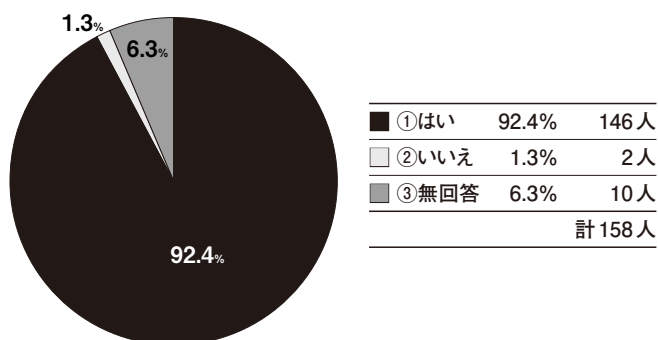
「はい」と回答した方の理由(自由記述、抜粋)

燃料電池とエコハウス／科学と未来の生活、科学と医療／日常生活から経済活動まで科学と社会は密接につながっている／科学リテラシーの普及の重要性／裁判と社会と科学／従来→これからの切り替わるためには少なからず「科学」が関係すると思いました／教育機関における科学の面白さをどう伝えられるかと考えさせられた／世界のエネルギー問題に対して科学の知恵で乗り越えていけたらと思いました／自分で知る理解するということの大切さを実感しました／市民活動の本来のあり方として、自然との関わりを再会するアプローチ／科学と地域社会とのつながり

今後も参加したいか

05

今後もこのようなイベントがあれば参加したいですか。



「はい」と答えた方はどのようなイベントに興味がありますか。(複数回答可)

①家族向け	16.4%	58人
②サイエンスコミュニケーションの現場に携わる人向け	12.2%	43人
③理科教育に関心のある人向け	13.6%	48人
④科学者・研究者と直接交流ができるイベント	14.7%	52人
⑤大学生・大学院生・若手研究者向け	9.9%	35人
⑥最先端の科学を知ることができるイベント	18.7%	66人
⑦科学技術の政策について語り合うイベント	10.8%	38人
⑧無回答	3.7%	13人
計 353人		



出展者アンケート



サイエンスアゴラ2009に参加した出展者へ、開催後にアンケートを行いました。一部をご紹介します。

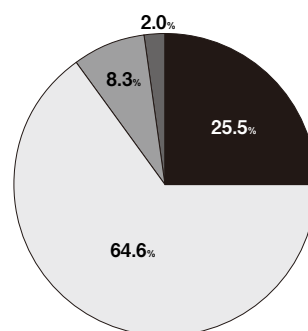
●調査日 11月10日(火)～12月末

●回答数 48人

実施したプログラムについて

01

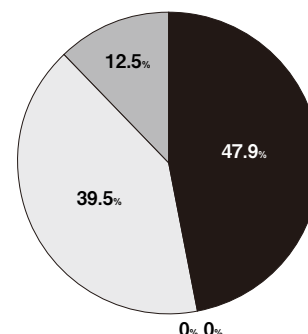
■ ①とても満足	25.5%	12人
□ ②満足	64.6%	31人
■ ③やや不満	8.3%	4人
■ ④とても不満	2.0%	1人
計 48人		



来年度の参加について

02

■ ①出展したい	47.9%	23人
□ ②条件次第で出展	39.5%	19人
□ ③出展しないが参加する	0%	0人
□ ④出展も参加もしない	0%	0人
■ ⑤無回答	12.5%	6人
計 48人		



来年度の参加・出展者へのメッセージ(一部)

03

●来場者との距離が近いので、直接の声を聞く事が出来る。自分の専門分野をアピールしながら、多くを学ぶことが出来、とても良い刺激になると思う。また、出展者同士のつながりも出来ると思うので、様々な可能性を掴むことの出来るイベントだと思う。(研究者:大学)

●自由な雰囲気の中で科学の交流が出来る貴重な場です。学校関係への広報を工夫して中学生、高校生の出展と参加を増やす必要があると思います。(高校教諭)

●多くの方と情報交換や交流をすることができ、今後の活動に大変役立ちました。今後もこのような交流の場は必要だと、改めて感じました。次回もぜひ参加したいと考え

ております。(学生)

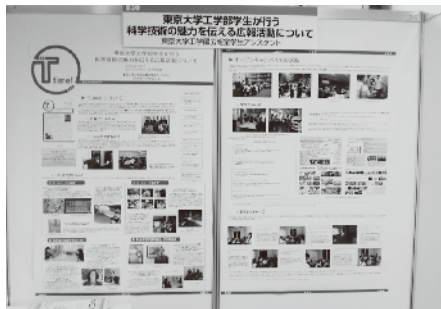
●どのような団体であっても平等に参加を受け付けてくれ、整った設備やサポートを与えてくれるアゴラは貴重な情報発信ならびに多様な方々とのコミュニケーションの機会です。ぜひ積極的な参加、そして今までの科学コミュニケーションの概念を打ち破るようなアイデアを形にされることを期待します。(任意団体)

●これだけの規模で、これだけの個々のスペースを確保してくれる、しかも無償のイベントは稀有だと思います。また、「科学」をキーワードにかなり多様な方が参加していて、交流できる事はとてもよい刺激になります。(研究者:研究機関)

東京大学工学部生による広報活動

東京大学工学部広報アシスタント 郷原浩之

私たち東京大学工学部広報アシスタントは隔月で広報誌を発行しています。本誌は工学部への進学を検討している高校生や東京大学の学生を対象として、先端研究の魅力や工学部生活の実情などを紹介しています。5年以上活動しているものの、読者の意見を頂く機会は少なく、発信している情報がニーズに合っているかを常に自問自答してきました。このような悩みは科学技術発信分野では常に付きまとうものではないかと考え、科学技術のアウトリーチ活動に深く携わっている先輩方が集うサイエンスアゴラへ出展し、意見をお聞かせしようと決めました。実際に出席して、参加者間の交流の活発さが印象的でした。各々がアゴラを成功させようという思いが強く、展示発表にありがちな待ちの姿勢は一切ありませんでした。活発な交流の中ではお褒めの言葉だけでなく、手痛い意見を頂くこともありました。ここでの意見は本誌の改善に強く役立っています。このような本音を言い、言われる環境はアゴラの魅力だと考えます。他団体と実際に交流することで、自分たちの立ち位置が分かります。アゴラへの参加をきっかけとして、私たちの「学生のみで記事作成を行う」という特徴をどのように活かし、差別化していくかを強く意識するようになりました。また私たちが読者対象としている一般来場者から感想や改善についてのヒントを多く頂けました。ともすれば独善的になりがちだった広報誌編集において、多くの方の意見を聞くことができたのは有益でした。



高校生のブース展示を実施して

埼玉県立浦和東高等学校 教諭 原田新一郎

本校は本年度、JSTのSPP(サイエンス・パートナーシップ・プロジェクト)に採択され、「水の不思議で科学する」をテーマに10名の生徒が活動しました。千葉大学大学院理学研究科と連携し、8月に実験(Antibubble、ミルククラウン、雪の結晶とダイヤモンドダスト、化学振動反応)と研究室内で結果発表をしました。さらに大きな場での発表を目指しサイエンスアゴラに出展することになりました。生徒たちは自分の研究をとおして、一般市民、科学者、芸術家、教育関係者と交流する中で、ディスカッションの楽しさと意義を学ぶことができました。とりわけ大学や研究所の先生方に、初対面にもかかわらず研究内容を説明出来たこと、先生方が説明を真剣に聞きディスカッションをしてくださったこと、そしてさまざまなサジェスションをいただいたことに生徒は大きな感動を覚え、科学の奥深さと面白さを知り、モチベーションを高め自信を深めることができました。「大学の先生と話すのは楽しい」「来年も参加したい」という感想にもそのことが現れています。本校科学部では研究にあたって独創性を重視しており、身の回りの現象や出来事を科学の眼でとらえること、異分野の知見や着想を大胆に取り入れること、科学遊びやディスカッションを楽しむことの3点を活動に取り入れています。アゴラでは、これらのことを科学者との交流をとおして実践することができ、今回の経験は生徒たちの貴重な財産となりました。



くじら号、サイエンスコミュニケーションへの船出

独立行政法人海洋研究開発機構 海洋・極限環境生物圏領域
海洋生物多様性研究プログラム 佐藤孝子



15年ほど前の転職をきっかけに「深海」の研究に関わり始め、それ以来、潜水船で潜りながら、微生物の研究を続けてきました。同時に、知られざる深海という世界や生物の魅力をもっと多くの人たち、特に次世代を担う子供たちに紹介していきたいと思い始め、2年ほど前に出来上がったのが「くじら号のちきゅう

うだぼうけん」という絵本です。さらに私は「チームくじら号」を結成し、「絵本読み聞かせギターライブ公演」活動を展開して参りました。これは、「深海」の歌とともに絵本を読み聞かせることが導入部となり、その後深海生物の解説をしながら本物の標本をさわって頂くことで、未知な世界の深海をリアルに実感して頂くプログラムです。皆さんのご意見を取り入れながら試行錯誤中の当チームが、サイエンスコミュニケーションのお祭りにも船出するチャンスを初めて頂き、ドキドキしながら迎えたのがアゴラ2009です。90分という長時間を頂けたので、読み聞かせの他にクイズや実験などの多彩なプログラムで、より総合的、立体的に深海を体験してもらい、お陰さまでチームも一回り大きく成長することができました。ただ、今回は諸先輩方の活動をゆっくり体験したり、交流したりする余裕がほとんどなかったのが、唯一の心残りです。ご縁があれば、来年のアゴラにも新作を用意したくじら号で船出し、今度はサイエンスコミュニケーションの専門家のご意見も伺いつつ、アゴラをぜひ一緒に盛り上げていきたいと思っています。

MANGA日本発の科学コミュニケーション・メディア

東海大学 理学部 佐藤 実

科学コミュニケーションのメディアとしてのマンガについて考えるワークショップ「マンガは科学を伝えるか!？」を開催しました。科学や数学のマンガ入門書、しかも読者として大学生や社会人など従来の学習マンガよりも高い年齢層を想定した本が、相次いで出版されています。マンガは、絵と文章という静的な要素で構成されながらコマ割りによって動きを表現することができ、動画コンテンツとは異なり読者のペースで読み進むことができます。国際的に日本の表現形式としても認められつつあります。このようなマンガに日本発の科学コミュニケーションのメディアとしてのポテンシャルを感じ、このワークショップを企画しました。ワークショップでは、はじめに『マンガでわかる物理 力学編』の著者である新田英雄氏(東京学芸大学)、英語や韓国語など各国語に翻訳されている『マンガでわかるシリーズ』の編集者である津久井靖彦氏(株式会社オーム社)、マンガ制作プロダクションの市川明德氏(株式会社トレンド・プロ)より、それぞれのマンガとの関わりについてお話し頂き、その後に参加者と意見交換を行いました。話しやすい雰囲気をつくるために椅子だけを車座に並べた会場には、40名の方々に足をお運び頂きました。日本のマンガは科学コミュニケーションのメディアとして国際的に通用するのか、という問題意識から企画したワークショップでしたが、参加者の皆さんと意見を交換するうちに、今後の世界に向けた展開に手応えを感じる事ができました。



科学技術を通じた「仲間」を増やすために

新日本石油株式会社 社会環境安全部 杉浦 出

当社は社会貢献「わくわく環境教室」を実施し、次世代を担う子どもたちへの「環境・エネルギー教育」を行っています。楽しく学びながら地球環境を意識した行動のきっかけを提供することは、とても大切なことだと考えています。サイエンスアゴラは「科学コミュニケーションをキーワードに多くの人が科学を体験するイベント」で、「温暖化とその防止の科学」という主題は、イベント趣旨に沿っていると考えて、08年から参加しています。内容は、楽しく記憶に残る体験を目指して①「人類が石油等の化石燃料を使用しながら発展したこと(体験として石油から取れる口で口ソクづくり)」、②「化石燃料の過度の使用が原因の一つである地球温暖化」、③「科学で温暖化を防ぐ努力(体験として燃料電池の組み立て)」としました。特に、世間一般の燃料電池体験メニューでは燃料電池がブラックボックスとして取り扱われているため、その技術の核心に触れた感触が得にくく、それを解消するために、白金担持電極や高分子固体電解質など確かめながら組み立てていただきました。お蔭様で、参加者からはとても好評で、当初目的は達成できましたが、課題は、参加者の環境行動につながるきっかけとして本当に有効か、もっと良い方法はないか、と創意工夫を続けることだと考えています。科学技術は、人類と地球の全ての生き物が永続的に豊かに暮らしていくために欠かせないものです。今後も、この科学技術を生み出す仲間、科学技術を使って地球を守る仲間を一人でも多く増やすために、アゴラへの参加など子ども向けの啓発体験イベントへの取り組みを続けていきたいと考えています。



「志ある人」から気づくために

「つくる、つながる、つかう」プロジェクト(三つ部) 吉澤 剛

自然科学系・社会科学系研究者、社会起業家などの実務家、中間支援者など、社会的な問題の解決に向けた活動を実践・支援していたり、そうした活動に関心や意識の高い方々を招いたワークショップを開催しました。アゴラで開催することにより、ゲストがこの場からそれぞれの活動に役立つ「気づき」を持ち帰れるようにするとともに、多様な一般参加者たちとの交流を深められるようにしました。終了後のアンケートによると、ゲストからは1時間半では議論の時間が短いこと、一般参加者からはもっとゲストと一緒に議論したかったことなどが挙げられました。イベント終了後も別室にて議論を続け、とても盛り上がりましたが、今後はイベント内でも少し知識交流が深められるようにしたいと思います。一方の満足点としては、気軽に会話が広がるワールド・カフェという方式や、異なるフィールドの「志のある人」たちを一つの場に集めることで、新たな出会いができたことが挙げられます。実務家の方々は研究者側に問題解決に貢献したいという意欲が強いことを認識し、研究者の方々は社会的な問題を解決するための組織のあり方について洞察を深めることができたようです。今後の活動に対しては、こうした機会を増やすこと、活動を継続していくこと、テーマやメンバー設定にこだわること、などの提案をいただきました。三つ部では、ここで得た知見やネットワークを活かして、新たな人も巻き込みながらゆるく活動を続けていきたいと思っています。



「アゴラサポーター」の実施で 見えた可能性

企画分科会委員 松本 浄

今回は初めてボランティアスタッフを組織し、アゴラの出展を有機的に結ぶ「アゴラサポーター」という活動を試みた。参加した学生や社会人は4日間で28人、全員アゴラ初参加だ。「アゴラのコンシェルジュ」をキーワードに日本科学未来館の笠松舞さんが事前研修を実施。当日午前は各出展を回って内容の理解に努め、午後はそれに基づいて来場者の好みや要望に合わせた誘導・解説を心がけた。結果は概ね友好的な反応で、サポーター達からは反省点もあったが来場者に喜んでもらったとの感想が多かった。ただし今回は出展者による案内も多く、少数の来場者に多数の関係者が声をかける場面もあった。出展側の積極性に、集客力が追いつかなかったのでは私は感じている。意外な収穫だったのは、サイエンスアゴラに初めて参加したサポーター達の多くが活動を通じてアゴラの「ファン」となり、改善の議論などに盛り上がったこと。アゴラの魅力を再認識できたとともに、こうした熱意にどう応えていけるのか、次回以降の課題になった。

	10月31日	11月1日	11月2日	11月3日
サポーター活動人数	12人	17人	10人	10人

〈サイエンスアゴラに参加して〉

東京工業大学 工学部情報工学科 4年 永沢 槿子

今回、所属大学からのインターンシップとして、サポーターのメンバーに登録させていただきました。サイエンスアゴラには初めて参加しましたが、運営・案内サポーター・見学と様々な立場に関わることができ、貴重な経験ができました。普段触れる機会のない世界を見、聞き、体験することで、様々なことを考えるきっかけとなる密度の濃い4日間でした。具体的に担当した仕事の一つとして、案内サポーターがあります。各展示ブースの内容を把握し、来場者に合った案内をすることが主な役割でした。最初は手探りで来場者に何と言って話しかければ良いのかもわからない状態でしたが、他のサポーターの方々と相談し、話しかけるきっかけや話の広げ方などを試行錯誤する内に、段々と案内らしいことができるようになりました。4日目には、何も知らずにサイエンスアゴラに来た来場者に対してその趣旨を説明し、参加するきっかけ作りを手伝うことができ、少し自信になりました。同様に、他の方々にも自分の作成したおすすめプログラムを配布して頂き、来場者がアゴラを楽しむのに少しでも役立ったのでよかったですと感じています。普段私の周りには理工系の学生もしくは研究者が多いですが、サポーターには日芸の学生、科博のSC受講生、未来館のボランティアの方など年齢も仕事も様々な方がおり、サイエンスに関わる・興味を持っている人がとても多様なことに驚きました。その人たちから良い刺激を受けることができました。「サイエンスコミュニケーション」は、自分が思っていたよりも大きく広い世界でした。出展者や目的を持って来ている来場者は非常に意識が高く、アゴラのこれからの可能性を感じました。と同時に、全く知識のない人に対しては浸透度がまだまだ低いとも感じました。アゴラの認知度を上げることは、今後の大きな課題であると思っています。

シンポジウム「これからの科学コミュニケーションを考える」

登壇者 (敬称略)

レポート▶サイエンスアゴラ事務局

新井紀子(国立情報学研究所 教授)、篠塚勝正(沖電気工業株式会社 会長)、高橋真理子(山梨県立科学館 主任学芸主事)、日野明寛(独立行政法人農業・食品作業総合研究機構 食品総合研究所 食品機能研究領域長)、吉川弘之(独立行政法人科学技術振興機構 研究開発戦略センター センター長) / コーディネーター; 美馬のゆり(公立はこだて未来大学 教授)



本イベントはサイエンスアゴラ2009のメインシンポジウムとして開催されました。冒頭で美馬氏より、「異なる分野間のコミュニケーション」をテーマに進めていくことが説明されました。

まず、5名の登壇者の方からお話をいただきました。

●「経済界から見た科学コミュニケーション」(篠塚勝正氏)

世界的な課題が累積する中で「科学技術を駆使して世界成長に役立つとともに、地球環境を回復していくことが与えられた大きな命題」とした上で、篠塚氏本人が掲げる「エコイノベーションで美しい地球を22世紀に」というビジョン実現のために、科学技術、市場、産業界、行政等の異なる分野間のコミュニケーションが必要だと語られました。また、経済界の考える科学技術コミュニケーションの原点を「利用者(市場)と提供者(専門家;基礎技術研究開発)との素直な会話により、ニーズとシーズを一致させること」とし、その促進のために科学技術コミュニケーションの重要性も述べられました。「日本が抱えるたくさんの課題をきちんと解決し、それを日本のため世界のために発信していくことが大切」とし、(1)国際競争力強化のための企業間連携・協調のあり方、(2)知財権を保護しつつ、海外パートナーとのコミュニケーションのあり方、(3)分野横断の総合力、異分野・異文化間コミュニケーションのあり方、(4)人間力のある国際型人材の育成、若者の理系離れ(大人の「理科離れ」)対策、(5)科学技術コミュニケーションの育成、の5つを大きな課題として挙げました。

●「世界的な課題解決に向けた「情報循環」(吉川弘之氏)

「地球規模の課題を解決するためには情報循環を早める必要がある」と述べ、具体的には、「①観察型科学者」→「②構成型科学者」→「③行動者」→「④社会、自然」→「①観察型科学者」…という情報のループを説明されました。「①観察型科学者」が物事の状態を観察し、問題点を把握する。その警告を「②構成型科学者」が聴取し、社会において科学的知識を使用する「③行動者」に対して助言する。その助言をもとにした行動が「④社会、自然」に影響を与える。その状況を「①観察型科学者」がさらに観察し…という情報循環です。吉川氏は情報循環を促進するための課題として、①観察型科学者; 全体観察科学を作ること、②構成型科学者; 行動者の行動の根拠になる知識を適切に社会に情報発信すること、③行動者; 助言の活かし方を熟練させること、④社会、自然; 行動者の行動が社会や自然に与える影響の理論研究の推進、を挙げました。最後に、「情報循環のループを促進するためにどのようなコミュニケーションが必要なのかを具体的に考えていくべきだと提案したい」と述べました。

●「食品安全のリスクコミュニケーション」(日野明寛氏)

日野氏は「結論としては科学者が伝えたいことと一般の方が知りたいことは違うこと

を明言しました。その理由は、一般の方は「新しい技術は将来悪い影響が出るに違いない」というイメージ先行の「感覚的リスク」を持っている一方、科学者は考えられるすべての科学的情報を元に安全性を判断しているものの「絶対安全」と宣言できない実情があるからです。このような状況で一番大切なのは「顔と顔をつき合わせてその言葉が何を意味するのか、何を知りたいのかを聞きながら話をすること」と語りました。教育現場の副読本の表現や、産業界のコンビニ広告表現、残留農薬のイメージを過剰に悪くする新聞記事、行政担当者の新聞コメント、研究者のリスクコミュニケーションに対する自覚などの例を挙げながら課題を述べました。リスクコミュニケーション活動は研究所の担当者だけでは全国展開ができないため、自治体と協力して地元の人材育成に取り組んでいるそうです。

●「研究者の研究者による次世代科学コミュニケーション」(新井紀子氏)

「分野細分化に伴う分野横断研究コミュニケーション力の低下」「分野や所属機関によるデジタルデバイド」「データベースの整備の一方で連携は未成熟」な状況を課題として挙げ、新井氏自身が取り組んでいる「Researchmap」プロジェクトを紹介されました。「私が考えたのは研究者の『見える化』。サイエンスというものがインターネット上でまとまって見られるような基盤づくり」と述べ、博士課程の学生、ポスドク、科学コミュニケーターなど、科学技術にかかわる研究者の専門分野や研究経歴に関する情報をインターネット上に集めることで、研究者同士、また国民とのコミュニケーションを同時に満足させられるシステム構築を目指したそうです。キーワード検索も可能なので「融合的研究のきっかけや若手研究者のリクルートなどとして活用してもらえれば」と述べました。「『Researchmap』のように自走形の情報発信タイプのコミュニケーションの在り方も今後考えていく必要があるのでは」とまとめました。

●科学館での「ユニバーサルなコミュニケーションの場をめざして」(高橋真理子氏)

高橋氏が担当するプラネタリウムを活用し、科学館オリジナル番組「戦場に輝くベガ」がきっかけでできた市民団体との取り組み、星や天文に関するコミュニケーションを通してできた「星の語り部」の実践を紹介してくれました。星や天文を遠くに感じていた人々が、プラネタリウムの鑑賞やワークショップ、これらの市民活動を通して自分の中の問題として科学を取り込む様子を目の当たりにし、高橋氏はそのために大事なことは、「表現(表現としてステージに立つこと)」「共有の風景を持つこと」「場の力」「車座文化」と述べました。

● ● ● ● ●

続いて行われた自由討論では、「広げる(コミュニティ内で)」「繋げる(コミュニティを超えて)」の2つの視点について討論が行われました。篠塚氏はそのための手法として「様々な利用者コミュニティとの『素直な会話』が大切」と述べました。吉川氏はSTSフォーラム(科学者の科学的な情報を世界で共有する目的の国際会合。科学者、政治家、産業界、ジャーナリストなどが参加。)でのコミュニケーションの様子から、「一般の方と科学コミュニケーションをするのにこれからは『予測』の視点が大切」と語りました。日野氏は心がけていることとして「異分野とのコミュニケーション」「何度も会うこと」と述べました。新井氏は異分野研究の難しさについて、「各々が自分の研究がメインで、他の分野はお手伝いと思っている」とし、「『Researchmap』での出会いをきっかけに異分野研究のニーズが生まれれば」と述べました。また高橋氏は「それぞれの人が求めるニーズや、人々の中にある経験を尊重することが『広げる』『繋げる』ことの大原則」と語りました。続けて吉川氏は、「コミュニケーションの科学を考える人が少ない。学問研究として取り上げてこなかったのは問題。サイエンスアゴラは今までなかった空間を作っている。これまで科学的な知恵を作り出してきた『科学』とは違う形の『科学』を作り出していけるのではないかと期待を寄せ、最後にアゴラ実行委員も務める美馬氏より、Jean-Jacques Rousseauの「分断化された民衆の生活における共同性を獲得するために祝祭空間を生み出す必要がある」という言葉とともに、「アゴラの由来は『広場』。祝祭感覚を持つアゴラは皆さんに力をいただきながら発展していきたい」とまとめられました。

作家トーク「理系のエンターテインメント」

登壇者 (敬称略)

レポート▶サイエンスアゴラ事務局

小山宙哉(漫画家)、向井万起男(慶應大学病院病理診断部部长)

講談社発行のマンガ週刊誌「モーニング」で『宇宙兄弟』を連載している漫画家の小山宙哉氏と、連載のそもそもの大きなきっかけとなった本『君について行こう』の著者、向井万起男氏による対談が行われました。お二人の出会いから、先端科学技術をテーマとした作品制作の現場、サイエンスコミュニケーションの一手法としてのエンターテインメントの可能性などを語っていただきました。



二人の初対面は連載開始前の取材。小山氏は「ほかの取材と違ってすごく印象に残った」と振り返り、「宇宙飛行士といえば優秀でパーフェクトなイメージが強いが、性格の悪い奴とか汚い奴とか、ごくごく普通にいるような人を宇宙飛行士として描いていいか」との小山氏の質問に、向井氏は「何でもいよ」と答えたというエピソードを紹介してくれました。この言葉で小山氏はとてもストーリーが描きやすくなったといいます。読者を引きつけるストーリー展開の裏には、向井氏の大きな一言があったようです。

宇宙開発をテーマとしている「宇宙兄弟」。実際に宇宙航空研究開発機構(JAXA)やNASAに取材したり、各機関が発行している資料を調査し、ストーリーに反映させているそうです。小山氏から、JAXAへ取材に行った際、帰りのタクシーを待つ間にJAXA職員から立ち話で聞いた話がおもしろかったので作品中に盛り込んだというエピソードも紹介されました。小山氏が理系ではないと告白すると、向井氏は、理系と文系の分類は難しいと断った上で「帰り際に立ち話で話したということは、JAXA担当の方(理系)はそのエピソードを一般の方に伝えておもしろいかということがわかっていない可能性がある。何がおもしろいか見極めて伝えるというのは、理系の人がいいのか、文系の人がいいのか、なかなか難しいところ」と、科学コミュニケーターの資質にも関わるような言及もありました。

今回の対談のテーマ「理系のエンターテインメントの可能性」について、向井氏は「可能性は十分ある」と断言されました。例として「ジュラシック・パーク」を挙げ、「どんなに奇想天外なストーリーであっても、根っこに事実に基づいた論理があれば、身近に思えるレベルでの理系のエンターテインメントは十分成立する」とコメントされました。向井氏はさらに、「科学を伝えることについて、メディアの方が最初からあきらめている面があるのでは」ないか、「例えば宇宙飛行士をめぐる報道では、宇宙飛行士がどんな実験をやっているかを伝えるのが一番おもしろいはずで、『宇宙で何を食べているか』などという内容を報道する時代はもう終わった。初めから実験の話をしてわかりっこないというスタンスはやめてほしい」とも語りました。小山氏もそれを受けて、「たしかに宇宙で行われている実験などの内容をわかりやすくおもしろく伝えてくれる人がいたら、みんな興味を持つはず。自分の漫画の中では六太(主人公)たちにその役割を担わせている」と話題が展開しました。司会者からの、「例えば漫画ではどのような実験を描くことおすすめしますか?」との問いに、向井氏は「ISSで行われている世界中の実験を見た方がいい。日本を含め外国もみなそうだが、自国の情報ばかり取り上げている」と指摘。奥様の向井千秋氏の実験を例に出し、「女房が宇宙で行った81の実験は、実際には日本・ヨーロッパ・アメリカ・カナダなどいろいろな国の実験が含まれている。これからの科学技術の情報発信にはそういったグローバルなセンスが必要では」と示唆されました。

時間いっぱいまで会場からの質問に答えた後、最後に向井氏が「アメリカやヨーロッパでは、宇宙モノというと硬派な読み物ばかり。『宇宙兄弟』は日本独自のカルチャーである漫画を武器に使っているのだから、アメリカなどに進出したら大きなインパクトがあると思う。アメリカ人ジャーナリストが書いた堅い本と真っ向勝負できる作品だと思っている」とコメントし、対談は終了しました。

ぼくの好きな先生～理数編

登壇者 (敬称略)

レポート▶サイエンスアゴラ事務局

酒井邦嘉(東京大学准教授)、廣井禎(筑波大学附属高校元教諭)／松原直美(精神科医)、桜井進(東京工業大学世界文明センターフェロー)／深城英弘(神戸大学准教授)、百瀬忠征(都立戸山高校元教諭)／進行;中山迅(宮崎大学教授)

進路を決めるきっかけは様々ですが、本セッションでは、理系の教師こそ第一級のサイエンスコミュニケーターであるべきだとの視点から、小中高時代に出会う「先生」に注目し、第一線で活躍する研究者とその恩師3組に、進路決定に影響を受けたことや、興味関心を高める指導方法など、当時を振り返り語っていただきました。

まずは、東京大学准教授の酒井邦嘉氏と恩師の廣井禎先生の組。酒井氏は当時を振り返り、廣井先生の最初の言葉「物理は自分で考えないとわからないから、僕はできるだけ説明しないようにします」が最も印象に残っているそうです。自分で研究を始めてからその言葉の意味に気づき、ある種の哲学を廣井先生から最初に植え付けてもらっていたのだと実感したそうです。困窮の石井邦生9段の言葉を交えて「サイエンスに限らず納得いくまで自分の答えを見つけようとする事の大切さが、教育によって得られれば素晴らしいこと」と述べました。一方、廣井先生は、科学に魅力を感じさせるための「一番肝心なところは、生徒本人がつかまえてくれなければ」と実感されているそうです。指導方法の意識転換のきっかけとして同僚の日本史教諭のエピソードを紹介され、常に「定義を教えた後は計算問題を一所懸命やるようなスタイルとは違うやり方を考えるようになった」そうです。

次は精神科医の松原直美氏と、高校時代に通っていた塾の恩師、桜井進先生の組。松原氏は、桜井先生から「数学や物理のことだけでなく、いろいろな夢を教えてもらった」そうです。桜井先生は、当時から自分の好きな数学者について講義中に情熱的に話していたそうで、その影響で「自分のなりたい人物像を追いかける力」を持つことができたそうです。対して桜井先生は、当時の講義と同じように、ご自身で制作された映像を紹介くださいました。数学という言葉を通して、物理学、化学、生物学、経済学、哲学などを統合的に表現する映像により、受験とは完全に切り離れた科学の世界を伝える講義を月に1回行っていたそうです。ご自身が衝撃を受けたさまざまな数学者を取り上げることで、真理を探求しようとする最初の思いに火をつけることがねらいだったそうです。

最後の組は、神戸大学准教授の深城英弘氏と、高校生物の恩師の百瀬忠征先生。深城氏は当時、百瀬先生自身が植物の研究をしていたことが最も印象的だったそうです。時には海外の国際会議で発表している様子から、研究者としての百瀬先生にもあこがれる思いを持っていたそうです。また、百瀬先生が授業で雑誌『ネイチャー』の記事を紹介してくれたことも印象に残っているそうで、「毎週準備するのは大変だったと思うが、リアルな最先端の新発見を生徒に直に伝えることで、自然科学の魅力を伝えたかったのではないかと、当日の百瀬先生の想いを代弁しました。一方、百瀬先生は「教員採用から4～5年たち余裕が出てくると教科書をただ解説する授業は生徒にとって意味があるか」と、いわゆる「地獄のささやき」に悩まされた事を明かしました。それを救ったのが1年間の大学での研究活動だったそうです。そこで出会った若い研究者たちから科学の楽しさを教わり、百瀬先生自身が研究活動の楽しみに気づき、「生物学はこんなにおもしろい」ということを生徒に伝えられればいいと自信を持つことができたそうです。最後にフランスの詩人、ルイ・アラモンの「教えるとは夢を語ること。学ぶとは誠実を胸に刻むこと。」という言葉を紹介してくださいました。

会場からの質疑応答の後、進行役の中山氏から「教員とは常に優れた学び手であり、優れた科学の実践者であり、生徒と一緒に科学に取り組むことを生涯の楽しみにしている人たち。教員自身も何かを追究し、生徒とライバルのような関係を築き、生徒からも学んでいる。これが『ぼくの好きな先生～理数編』が求める一つの理想像ではないか。」とまとめました。



語り場～新たなひろがりをもとめて～

レポート▶サイエンスアゴラサポーター 杉田真希

国立科学博物館サイエンスコミュニケーター養成実践講座と日本科学未来館科学コミュニケーター研修プログラムに携わる人々が中心となり、各グループのテーマに即した実践の効果や課題に触れながら、今後の科学コミュニケーションの有り方について議論しました。各グループのテーマは次のとおりです。

- G1 学校教育グループ「科学を使いこなすために必要な学びとは？」
- G2 研究者グループ「研究者のアウトリーチの目指すもの」
- G3 学校外教育、広報・普及グループ「価値を評価するモノサシは？」
- G4 市民、NPOグループ「選択できない市民を超えて」

まず、各グループともそれぞれの立ち位置で問題提起をし、その問題に立ち向かうためのスローガンを作りました。このスローガンをグループ間で理解し合いそれぞれの結論を出すために、とても白熱した話し合いがなされました。結論としては、エンターテインメント性とストーリーのある学術性のバランスをとること(G1)、多様なアプローチを可能にするために、自分の専門に捕われないこと(G2)、科学コミュニケーション活動には固定された評価体制を設けるべきではないこと(G3)、与えられた科学情報を鵜呑みにしない批判的な目を養うこと(G4)、などが出されました。

結論を導きだす過程で、現在の科学コミュニケーションを象徴しているような印象的なやり取りがあったのでご紹介します。研究者グループが「アウトリーチの評価システム」「異分野を介したリアでないアウトリーチ」「研究者側の戦略性(対象を絞る・広報戦略を立てる)」という3項目をスローガンとして掲げ、市民に動作原理を理解してもらった上で価値判断を委ねることが重要であると主張したところ、これに対し市民グループから、そもそもスローガンは他者に対して掲げられるべきなのに、そこに使われている言葉が理解しづらいと指摘されたのです。筆者はG3に参加していましたが、普段の姿は理系大学院生という名の研究者の卵ですので、自分に向けて言われているようでどきどきしました。筆者も、気をつけていても専門的な表現を使ってしまふことはあります(研究者グループは専門用語のことを「Jargon」と表現し、ここでも不親切であると指摘されていました)。

科学コミュニケーションについて話し合う場面でコミュニケーションの難しさが明白になるという、ある意味皮肉な一幕でしたが、このような事態はアゴラをより良くしていくための重要な示唆を与えてくれていると思います。上記のような光景は、アゴラのいたるところで見られました。発信側がどんなに自分で気をつけていても、受信側にとっては理解が難しいということはしばしば起こると思われまふ。このような問題を改善していくためには、他者の目が必要なのではないでしょうか。次回アゴラを開催する際には、出展者の伝えたいことを把握した上でより良い表現方法を提案する“科学プレゼンテーションのコンサルタント”のような存在がいると良いのではないかと思います。



アジアのアゴラ –文化の中のアゴラ

レポート▶サイエンスアゴラサポーター 佐藤春菜

講演者：細矢 剛(国立科学博物館 研究主幹)

進行役：山科直子(東京大学 特任教授)

パネリスト：韓国・中国・オーストラリアのサイエンスコミュニケーター、他



科学を文化に溶け込ませるには? 国立科学博物館で開催された特別展「菌類のふしぎ」では、菌を題材とした漫画「もやしもん」をフィーチャーし、大成功を収めました。科学と日本が世界に誇る文化である漫画の融合。この特別展の成功を事例とし、各国の文化と科学の関わりについて、日中韓豪を始めとする各国のサイエンスコミュニケーターや留学生、研究者ら約30名が意見を交わしました。

第一部：漫画を取り入れたサイエンスコミュニケーションの事例

昨年の秋、国立科学博物館で開催された特別展「菌類のふしぎ」は16万人もの動員数を記録しました。この企画に携わった細矢剛先生に、展示の概要についてご講演いただきました。

一展示会の目的は、きのこの標本やレプリカ、写真などを用いて、菌類の形態や役割の多様性を伝えること。では、どのようにして来場者を集めるかが問題。そこで、この特別展では「もやしもん」という漫画をフィーチャーした。

「もやしもん」は、菌類を目で見ることでできる主人公の農大での生活を描いた漫画。この中で、菌たちはキャラクター化されて登場する。特別展では、このキャラクターたちに展示の説明をさせた。他にも展示にはダンボールや木など菌が分解できるものを用い、そこに「もやしもん」の作者による直筆の落書きを用意するなど、様々な形で漫画のキャラクターを取り入れた。

第二部：全体ディスカッション

漫画はサイエンスコミュニケーションの有用なツールとなり得るという点は、参加者間共通の理解のようでした。その上で、漫画を取り入れることの長所と短所、その有効な取り入れ方について活発な議論が交わされました。主な意見を以下にまとめます。

- 漫画と科学の境界をはっきりさせることが重要なのでは。
- 「もやしもん」という漫画は知っているが、「菌」は何のことだか分からないということになりかねない。そこをしっかりとフォローしてあげることが、漫画を用いる際には重要だ。
- 漫画のキャラクターにはストーリーというバックグラウンドがあり、それを含めた人気があってこそ、来場者が集まる。ただのキャラクターがいれば良いのではない。

このような科学と漫画という組み合わせは、日本独自のものだと意見がオーストラリアの方からありました。それを受け、司会者からもサイエンスコミュニケーションのツールとしてそれぞれの国に適した“何か”を探して教えてほしいとお話がありました。確かに、日本での成功例が文化の異なる他の国でも成功するとは限りません。しかし、漫画というサブカルチャーを用いて科学を伝えたこの事例は、各国のサイエンスコミュニケーターにとって、自国の文化になじむコミュニケーションツールを探る1つのヒントになったのではないのでしょうか。

プログラム一覧

タイトルバーの見方

- ① イベントNo.
- ② 開催日
- ③ 開催会場
- ④ 開催時間
- ⑤ イベント名
- ⑥ 主催

①	A1	10/31	11/1・2・3	企画展示ゾーンa	10:00～17:00	👤🧪🌐
②	シルク・ド・さいえんすII					
③	科学技術広報研究会(JACST)					

ワークショップ、シンポジウム など

A1 10/31 11/1・2・3 企画展示ゾーンa 10:00～17:00
シルク・ド・さいえんすII
科学技術広報研究会(JACST) 👤🧪🌐

A2 10/31 イノベーションホール 10:30～12:00
科学ドキュメンタリーの可能性～新型インフルエンザ～
早稲田大学大学院政治学研究所科学技術ジャーナリスト養成プログラム 🧪👤🌐

A3 10/31 11/1 シンボルゾーン特設ステージ 11:30～11:50 13:30～13:50 15:30～15:50(1日は13:30～13:50のみ)
ノーベルかがくショー サイエンスアゴラススペシャル:
2008年ノーベル賞をもっと知りましょー!
日本科学未来館ボランティア[ノーベル隊] 👤🌐

A4 10/31 11/1・2・3 企画展示ゾーンa 10:30～17:00
細胞から宇宙まで! ～1周するとわかる、理研の歴史と最新の研究内容～
独立行政法人理化学研究所(理研) 👤👤🌐

A5 10/31 企画展示ゾーンb 特設シアター 10:30～12:00
Art, Brain & Communication! ―芸術と科学の接点―
東京大学科学技術インタープリター養成プログラム 🧪👤

A6 10/31 11/1・2・3 企画展示ゾーンb 10:30～17:00
デジタル4次元地球儀ダジック・アース
京都大学大学院理学研究科太陽惑星系電磁気学講座ダジック・グループ 🧪🧪🌐

A7 10/31 11/1・2・3 シンボルゾーン(科学メディア大集合ブース内) 10:00～17:00
「×理科」新しい理科マガジンを提案
松本 浄(フリーライター) 👤

A8 10/31 11/1・2・3 サイエンスライブラリ 10:00～17:00
CATALYSIS PARK～触媒ってなあに?～
触媒学会 👤🧪

A9 10/31 サイエンスライブラリ 10:30～17:00
応用物理ショーケース
社団法人応用物理学会 👤🧪🌐

A10 10/31 11/1・2・3 サイエンスライブラリ 10:30～17:00
ここまで分かった脳科学、まだ分からない脳科学
文部科学省科学研究費特定領域研究[統合脳]5領域 👤🌐🌐

A11 10/31 11/1・2・3 サイエンスライブラリ 10:30～17:00
脳の不思議を“見る、知る、感じる”実験工作教室
自然科学研究機構・生理学研究所、文部科学省「脳科学研究戦略推進プログラム」事務局 👤🧪🌐

A12 10/31 11/1・2・3 サイエンスライブラリ 10:30～17:00(31日のみ13:00～)
生命誌出張展
JT生命誌研究館(BRH) 👤🧪🌐

A13 10/31 11/1・2・3 企画展示ゾーンa 10:30～17:00(31日は11:00～17:00、3日は10:30～16:00)
かがく縁日パートII ものづくりをしながら科学を体験しよう
科学観物研究会 👤🧪🌐

A14 10/31 11/1・2・3 サイエンスライブラリ 10:30～17:00
日本沙漠学会と沙漠・黄砂・大気汚染について
日本沙漠学会、日本学術会議・農業委員会・風速大気物質問題分科会 👤🧪

A15 10/31 バス停留所付近(屋外) 13:00～17:00
体験試乗～燃料電池車で、ちょっとそこまで。
東京工業大学グローバルCOEエネルギー学理の多面的学術融合(東工大エネルギー-GCOE)
[共催]日産自動車総合研究所燃料電池研究室 👤🧪🌐

A16 10/31 イノベーションホール 13:00～14:30
三次元映像のカットイングエッジ(最先端情報)
国際科学映像祭実行委員会 🧪👤🌐

A17 10/31 11/1・2 シンボルゾーン 16:30～17:00
サイエンスアゴラでお月見!!
星空公園 👤🧪

A18 10/31 みらいCANホール 10:30～12:30
サイエンス・プレゼンテーション2009「語ります! ホットサイエンス」
日本科学未来館【後援】フリティッシュ・カウンスル 👤🧪🌐

A19 10/31 みらいCANホール 13:30～16:30
サイエンス・プレゼンテーション2009「科学の鉄人」
科学教育フォーラム実行委員会 👤🧪🌐

A20 10/31 イノベーションホール 17:00～18:00
サイエンス・プレゼンテーション2009「ワークショップ」
日本科学未来館、科学教育フォーラム実行委員会 👤🧪🌐

A21 10/31 企画展示ゾーンa 13:00～14:00
自然放射線の飛跡を見てみよう!
有限会社ブド 👤🧪🌐

A22 10/31 11/1・2・3 シンボルゾーン 10:00～17:00
科学メディア大集合
サイエンスアゴラ実行委員会 👤🧪🌐

A23 10/31 11/1・2・3 企画展示ゾーンa 10:30～17:00
科学オリンピック村 「世界標準の科学を体験しよう!」
日本科学オリンピック推進委員会 👤🧪

A24 10/31 11/1・2・3 企画展示ゾーンa 10:30～17:00
南半球のまだ見ぬ星空
～知られざる南半球の星空への誘い(いざない)～
トップツアー株式会社 👤🧪

A25 10/31 11/1 企画展示ゾーンa 31日10:00～11:30、15:00～16:30 1日10:00～11:30、12:30～14:00
応援します! 地域に芽生えるサイエンス～JST地域の科学会推進事業の紹介～
独立行政法人科学技術振興機構 👤🧪🌐

A26 11/1 みらいCANホール 10:15～11:45
科学ライブショー「ユニバース」～お台場が宇宙空間になる～
学生集団「ちもんず」(Team Chimons) 👤🌐🌐

A27 11/1 イノベーションホール 10:30～12:00
なるほどエコトーク!「地球を感じる もうひとつの空の旅」
国立環境研究所 👤👤🌐

A28 11/1 サイエンスライブラリ 10:30～17:00
「サイエンス・ダイアログ」～科学で世界とつながれ!～
JSPS 独立行政法人日本学術振興会 🧪🌐🌐

A29 11/1 イノベーションホール 14:30～17:00
分かった脳、まだ分からない脳―最新の成果をもとに
文部科学省特定領域研究[統合脳]5領域 🌐🌐

A30 11/1 シンボルゾーン特設ステージ 15:15～16:45
科学演劇～あおもりからの提案～
八戸工業高等専門学校 物質工学科5年 川端康正 👤👤

A31 11/1 企画展示ゾーンa 15:00～16:30
輪ゴムでオリジナルおもちゃを作ろう!
RIKA-Commu.(東京学芸大学・理科教育系学生有志) 👤

A32 11/1 企画展示ゾーンb 特設シアター 13:00～17:00
トーク&上映会「科学映像ドキュメンタリーを語る」
日本大学芸術学部、サイエンスアゴラ事務局 👤🧪👤

A33 11/2 会議室2 10:30～12:00
科学本が生まれるまで 著者、編集者、そして…
科学出版研究会 👤🧪👤

A35 11/2 イノベーションホール 15:00～17:30
理科教員養成の課題と将来への展望
国立大学法人東京学芸大学 👤🧪🌐

A36 11/2 会議室2 15:30～17:00
マンガは科学を伝えるか!?
佐藤 実(東海大学) 👤🧪👤

プログラム一覧

A37 11/2 会議室3 16:00～17:30
本音で語る「大学とは何か」
NPO 法人サイエンス・コミュニケーション

A38 11/2 みらいCANホール 16:15～18:45
“ツタエルコト”はどこにある?
—科学コミュニケーションと学術コミュニケーション—
長神風二 & 岡本 真

A39 11/2 会議室1 10:15～12:00
ワークショップ「米国サイエンス・オリンピックの競技種目と科学部指導について」
独立行政法人科学技術振興機構 理科教育支援センター

A40 11/2 みらいCANホール 10:30～12:00
トークセッション「ぼくの好きな先生～数編」
サイエンスアゴラ実行委員会

A41 11/2 イノベーションホール 10:30～12:00
アジアのアゴラ文化の中のサイエンス
国際研究交流大学村

A42 11/2 会議室3 10:30～12:00
語り場～新たなひろがりをもとめて～
科博 SC 養成講座×未来館 SC 研修プログラム

A43 11/2 企画展示ゾーンa 13:00～14:20 14:50～16:00(※同じ内容です)
体験しよう! 石油の不思議と未来のエネルギー・燃料電池
新日本石油株式会社

A44 11/2 イノベーションホール 13:00～14:30
理科教員のための面白くわく実験講座
日本科学未来館、サイエンスアゴラ実行委員会

A45 11/2 企画展示ゾーンb 特設ステージ 13:00～14:30
作家トーク「理系のエンターテインメント」
小山宙哉(漫画家)×向井万起男(病理学者、宇宙飛行士の夫)
サイエンスアゴラ実行委員会

A46 11/2 みらいCANホール 13:00～16:00
シンポジウム「これからの科学コミュニケーションを考える」
サイエンスアゴラ実行委員会

A47 11/3 会議室2 10:00～17:00
科学一魅せる情熱と魅せられる心
名古屋大学 社会貢献人材育成本部 ビジネス人材育成センター

A48 11/3 イノベーションホール 10:30～12:00
科学を伝えたいあなたに—科学ジャーナリスト塾の取り組み—
科学ジャーナリスト塾、日本科学技術ジャーナリスト会議、サイエンス映像学会

A49 11/3 会議室1 10:30～12:00
クローズアップ! 第4期科学技術基本計画
科学ひろば

A50 11/3 会議室3 10:30～12:00
「おしゃべりサイエンス」茶話会
Science Air「おしゃべりサイエンス」事務局

A51 11/3 シンボルゾーン特設ステージ 10:30～12:00
星の名産地やまなしプレゼンツ 星と月の物語&ライス!
Science Chest

A52 11/3 会議室1 13:00～15:30
最新技術から社会を考えるロールプレイ
i2ta(アイツタイイー)プロジェクト

A53 11/3 シンボルゾーン特設ステージ 13:00～14:30
「深海の不思議を体験しよう!」絵本読み聞かせギターライス
絵本読み聞かせ隊「チームくらり号」

A55 11/3 みらいCANホール 10:30～12:45
シンポジウム「世界のトップをめざすには～日本の研究教育環境を考える」
サイエンスアゴラ実行委員会

A56 11/3 企画展示ゾーンa 13:45～16:15
ロボットを使った、探求力・活用力を高める学習
レゴ エデュケーション/株式会社ナリカ

A57 11/3 企画展示ゾーンb 特設シアター 12:00～14:30
デジタルリマスター版アニメ「ニルスのふしぎな旅 劇場版」初上映会
サイエンスアゴラ事務局

A58 11/3 企画展示ゾーンa 10:15～12:45
レゴ教材で行う、楽しい新学習指導要領の授業実践
レゴ エデュケーション/株式会社ナリカ

A59 11/1 シンボルゾーン 特設ステージ 14:10～14:50
日本とオーストラリアのコラボ企画「サイエンスショー!」
日本科学未来館 [協力] 豪州国立大学科学理解増進センター、クエスタコン-国立科学技術センター
[協賛] 豪日交流基金

A60 11/1 みらいCANホール 13:30～15:00
「正しく知って、正しく備えよう、インフルエンザに」シンポジウム
日本学術会議 科学と社会委員会 科学力増進分科会、国立感染症研究所

A61 11/1 みらいCANホール 15:30～17:00
「科学を文化にするために」シンポジウム
日本学術会議 科学と社会委員会 科学力増進分科会

A62 11/1 企画展示ゾーンb 特設シアター 10:30～12:00
東大生によるサイエンスショー 宇宙観の一世界天文年に贈る、宇宙の歴史—
東京大学教養学部附属教養教育開発機構 [共催] 東京大学数物連携宇宙研究機構、[企画] 林 衛、滝川 洋二、[協
力] 全学自由研究セミナー「心を動かす表現法」受講生、東京大学サイエンスコミュニケーションサークル CAST

A63 10/31 11/1 2・3 シンボルゾーン 10:00～17:00
サイエンスアピール・ポスターデザインアワード
サイエンスアゴラ実行委員会

A64 10/31 シンボルゾーン特設ステージ 17:30～19:30
開幕セッション
サイエンスアゴラ実行委員会

A65 11/3 みらいCANホール 15:30～17:15
総括セッション
サイエンスアゴラ実行委員会

B1 10/31 メディアホール 10:00～11:20
テクノロジー×ライフスタイル 燃料電池がつなぐ未来
東京工業大学グローバル COE エネルギー学理の多角的学術融合(東工大エネルギー-GCOE)
[共催] 日産自動車総合研究所燃料電池研究室

B2 10/31 メディアホール 12:00～13:15
ポッドキャストによる科学情報配信への取り組み
インターネットラジオ局くらり

B3 10/31 体育館 13:00～14:00
水素驚室! 体感、水素のエネルギー
東京工業大学グローバル COE エネルギー学理の多角的学術融合(東工大エネルギー-GCOE)
[共催] 日光市教育委員会

B4 10/31 体育館 15:30～17:00
「星の語り部」出前プラネ～思い出の星見せませす
サイエンスクルー「星の語り部」

B41 10/31 国際交流会議場 13:00～17:00
「社会性の脳科学」シンポジウム
日本学術会議 脳と意識分科会、脳とこころ分科会、神経科学分科会

B42 10/31 メディアホール 14:00～17:00
「地球に生きる素養を身につけよう!」「地球を好きになる」教育の動機」シンポジウム
日本学術会議 地球惑星科学委員会・社会貢献分科会 [共催] 日本学術会議 地域研究委員会・地理
教育分科会、社団法人地球惑星科学連合地学教育委員会

B43 10/31 11/1 1F エントランスホール 10:30～17:00
「mini セルフエスタ2009」展示
日本学術会議 科学力増進分科会 [協力] お茶の水女子大学 Science & Education Center

B46 11/1 メディアホール 13:00～14:30
つなげる! 研究者と社会起業家
「つくる、つなげる、つかう」プロジェクト(三つ部)

B47 11/1 メディアホール 10:15～12:00 15:15～17:15
国際シンポジウム これからの理数系才能教育について考える
独立行政法人科学技術振興機構 理科教育支援センター

B48 11/1 会議室4・5(4F) 10:30～12:00
理系女性のきらめく未来!～語り合おう!女性研究者支援の明日～
独立行政法人科学技術振興機構 男女共同参画ワーキンググループ

B49 11/1 体育館 10:30～12:30 13:45～15:45(※同じ内容です)
折り紙飛行機教室
 東京大学工学部航空宇宙工学教室、NPO法人センス・オス・ワンダー、サイエンスアゴラ事務局
 [協力]日本航空

B50 11/1 国際交流会議場 13:00～15:00
国際科学オリンピック・フォーラム「才能×挑戦＝きみの未来」
 独立行政法人科学技術振興機構 [共催]日本科学オリンピック推進委員会(JSOC)

B51 11/1 会議室4・5(4F) 14:00～16:00
理系女性のきらめく未来!～進路選択と活躍する姿～
 独立行政法人科学技術振興機構 男女共同参画ワーキンググループ

B55 11/2 メディアホール 13:00～14:30
グローバルな市民参加への挑戦～温暖化世界会議の報告
 World Wide Views in JAPAN 実行委員会(WWViews in JAPAN 実行委員会)
 [後援]独立行政法人科学技術振興機構 社会技術研究開発センター(RISTEX)

B56 11/2 国際交流会議場 13:30～16:30
「統合生物学—生物をまとめて調べると見えてくる世界」シンポジウム
 日本学術会議 応用生物学委員会

B57 11/2 メディアホール 15:30～17:00
講演会「カリレオがひらいた宇宙」
 東京都中学校理科教育研究会、サイエンスアゴラ実行委員会

B61 11/3 体育館 10:30～15:00
レゴ® スロック 宇宙エレベーター クライマーレース2009 (LASER'09)
 日本大学、宇宙エレベーター協会

B62 11/3 体育館 10:30～17:00
磁石のいたすら
 東京電機大学 理工学部 物理学コース

B63 11/3 体育館 13:00～14:30
振動反応ってなんだろう—化学反応で生物リズム現象が
 桜美林大学リベラルアーツ学群

B64 11/3 メディアホール 10:30～12:00
公開討論「イノベーションと規制を考える」
 イノベーションと規制に関する検討会

B65 11/3 国際交流会議場 13:00～15:00
シンポジウム「わたしたちの未来を拓くサイエンス—地球・暮らし・いのち—」
 内閣府

B66 11/3 メディアホール 13:00～16:00
「世界の沙漠と砂漠化のはなし—植林・生物資源・黄砂・大気汚染等—」シンポジウム
 日本学術会議 農業委員会 風送大気物質問題分科会、日本沙漠学会

C1 10/31 別館 多目的室(11F) 10:00～17:00
あそんでまなぶ ゲーム de サイエンスカフェ
 順天堂大学医学部公衆衛生学教室 丸井英二

C2 10/31 別館 会議室1(11F) 10:30～12:00
中学生とともに考える—地球環境の未来は大丈夫?—
 KOJII CORNER(コージイ・コーナー)

C3 10/31 本館 会議室1(4F) 10:30～12:00
「社会における科学者の役割」を若手研究者が考える
 生化学者の会、脳科学若手の会、生物物理若手の会、物性若手の会、生命情報科学若手の会、天体・天文物理若手の会

C4 10/31 別館 会議室2(11F) 13:00～14:00
身近な子どもの不思議な世界
 一子どもたちは世界をどのように捉えているのだろうか?—
 早稲田大学大学院教育学研究科 発達心理学研究室(有志)

C5 10/31 本館 展示コーナー(1F) 13:00～14:30
科学コミュニケーションの大衆産業化は可能か?
 泉田賢一(おねけこサイエンスプロジェクト)

C6 10/31 別館 会議室1(11F) 13:00～15:00
研究の魅力を映像で伝えよう1—文化・宇宙・生き物—
 総合研究大学院大学 科学におけるコミュニケーションプロジェクト

C7 10/31 本館 会議室2(4F) 13:00～14:30
模型とモデルで知る未来を拓く分子の世界
 分子計算と視覚化研究会

C8 10/31 別館 会議室1(11F) 15:30～17:00
研究の魅力を映像で伝えよう2—すぐできる映像制作(入門編)
 総合研究大学院大学 科学におけるコミュニケーションプロジェクト

C9 10/31 別館 会議室2(11F) 15:30～17:00
博士学生主催「生命系博士の歩む道」
 —高校生に伝える実態とキャリアパスについての議論—
 生化学若い研究者の会 キュベツト委員会

C10 10/31 本館 会議室1(4F) 13:00～16:00
「世界の沙漠と環境のはなし—沙漠・温暖化・環境問題・人工降雨等—」
 シンポジウム
 日本学術会議 農業委員会 風送大気物質問題分科会、日本沙漠学会

C11 10/31 別館 会議室3(11F) 13:00～14:30
子どもの「どうして?」、大人の「なぜ?」に向き合う方法
 —親子で科学者に聞く家庭教育が変わる科学的な考え方—
 NPO法人センス・オス・ワンダー [協力]東京大学大学院工学系航空宇宙工学専攻

C12 11/1 別館 多目的室(11F) 10:30～12:00
宇宙よもやま話
 森 俊樹

C13 11/1 本館 展示コーナー(1F) 11:00～12:00
サイエンスカフェ「感染症、わからないなら聞いてみよう—食中毒からインフルエンザまで—」
 独立行政法人理化学研究所

C14 11/1 本館 展示コーナー(1F) 13:00～14:30
生き物の楽しさを語ろう—生物多様性の入り口
 NPO法人日本サイエンスサービス

C15 11/1 別館 会議室1(11F) 13:00～14:30
全国で活躍中! 学生が行う科学コミュニケーション
 大学院生出張授業支援プロジェクト

C16 11/1 別館 多目的室(11F) 13:30～16:50
星から読み解く“Where are you?”—戦前・戦中から現在まで—
 戦場に輝くベガ上映実行委員会

C17 11/1 本館 展示コーナー(1F) 15:00～17:00
かんたんえいごでサイエンス
 E Project

C18 11/1 本館 会議室1(4F) 10:30～12:00
「医療と心理学はどのように連携できるか」シンポジウム
 日本学術会議 健康・医療と心理学分科会

C19 11/1 別館 会議室1(11F) 10:30～12:00
裁判変革の時代—三次元CGの導入を考える—
 早稲田大学大学院 政治学研究科 ジャーナリズムコース

ブース、ポスター展示 など

B5 10/31 11/1・2・3 東京国際交流館(3F メインホワイエ) 10:00～17:00
★星のまち「佐久」で楽しむ 天文年★
 佐久市子ども未来館

B6 10/31 11/1・2・3 東京国際交流館(3F メインホワイエ) 10:30～17:00
感動を伝えよう! 授業に役立つ理科教材
 愛知工業大学

B7 10/31 11/1・2・3 東京国際交流館(3F メインホワイエ) 10:30～17:00
見せる科学、見える科学—サイエンスイラストレーションができるまで
 M&F

B8 10/31 11/1・2・3 東京国際交流館(3F メインホワイエ) 10:00～17:00
Oto1 (zero to one) 東京大学大学院理学系研究科有志
科学コミュニケーショングループ 活動報告
 Oto1 (ゼロトワン) 東京大学大学院 理学系研究科有志 科学コミュニケーショングループ

B9 10/31 11/1・2・3 東京国際交流館(3F メインホワイエ) 10:30～17:00
高校生が学会で研究発表をする—日本地球惑星科学連合の取り組み—
 一般社団法人日本地球惑星科学連合

B10 10/31 11/1・2・3 東京国際交流館(3F メインホワイエ) 10:30～17:00
科学ライブショー「ユコバース」と学生集団「ちもんず」の活動紹介
 学生集団「ちもんず」(Team Chimons)

プログラム一覧

- B11** 10/31 11/1・2・3 東京国際交流館(3F メインホワイエ) 10:30～17:00
「星の語り部」が誘う宇宙～出前プラネで届ける星空
サイエンスクルー「星の語り部」
- B12** 10/31 11/1・2・3 東京国際交流館(3F メインホワイエ) 10:30～17:00
日本大学N. 研究プロジェクトの紹介
大月 謙
- B13** 10/31 11/1・2・3 東京国際交流館(3F メインホワイエ) 10:30～17:00
常設サイエンスカフェ・ガリレオでの試み
名古屋サイエンスコミュニケーション研究会
- B14** 10/31 11/1・2 東京国際交流館(1F エントランスホール) 10:30～17:00
デザインとサイエンスで紡ぎだす「もりのみかた」
矢後直規 矢野真理子
- B15** 10/31 11/1・2・3 東京国際交流館(1F エントランスホール) 10:30～17:00
地球を救う正しい昆虫の食べ方講座
昆虫料理研究会 内山昭一
- B16** 10/31 11/1・2・3 東京国際交流館(3F メインホワイエ) 10:30～17:00
カイキのカイキ○東海大学皆既日食観測プロジェクト
東海大学皆既日食観測プロジェクト
- B17** 10/31 11/1・2・3 東京国際交流館(1F エントランスホール) 10:30～17:00
理科実験を盛り上げよう!!～ささえ隊の挑戦～
Supporting Science Experiment (略名: SSE)
- B18** 10/31 11/1・2・3 東京国際交流館(1F エントランスホール) 10:30～17:00
宇宙が子どもたちの心に火をつける。
独立行政法人宇宙航空研究開発機構(JAXA) 宇宙教育センター
- B19** 10/31 11/1・2・3 東京国際交流館(1F エントランスホール) 10:30～17:00
理科実験って楽しいよね。
理科教育研究フォーラム
- B20** 10/31 11/1・2・3 東京国際交流館(3F メインホワイエ) 10:30～17:00
宇宙映像、作ります!
自然科学研究機構国立天文台天文情報センター-科学文化形成ユニット
- B21** 10/31 11/1・2・3 東京国際交流館(3F メインホワイエ) 10:30～17:00
「Mitaka」で宇宙旅行を体験しませんか?
自然科学研究機構国立天文台
- B22** 10/31 11/1・2・3 東京国際交流館(1F エントランスホール) 10:00～17:00
科学と共に生きるということ ～それぞれの「のぞき窓」～
Oto1(ゼロトウワン) 東京大学大学院 理学系研究科有志 科学コミュニケーショングループ
- B23** 10/31 11/1・2・3 東京国際交流館(3F メインホワイエ) 10:30～17:00
星を見上げて来た人びと～位置を探して・戦争と天文学
戦場に輝くベガ上映実行委員会
- B24** 10/31 11/1・2・3 東京国際交流館(3F メインホワイエ) 10:30～17:00
ギャラリー Kato Lab. -コメントをください-
京大大学人文科学研究所/iCeMS/大学院生命科学 研究科
- B25** 10/31 11/1・2・3 東京国際交流館(1F エントランスホール) 10:30～17:00
あなたと育てる参加型手法データベース、公開します。
DeCoGIS:「市民と専門家の熟慮と協働のための手法とインタフェイス組織の開発」プロジェクト(JST 社会技術研究開発センター研究開発プログラム「科学技術と社会の相互作用」平成19年度採択課題)
- B26** 10/31 11/1・2・3 東京国際交流館(3F メインホワイエ) 10:30～16:00
産業と大学と学校とつなぐサイエンスコミュニケーション実践
～リハネスが推進する教育・人材育成プログラム～
株式会社リハネス
- B27** 10/31 11/1・2・3 東京国際交流館(1F エントランスホール) 10:30～17:00
茨城県北ジオパーク設立を目指した茨城大学生による試み
茨城大学地質情報活用プロジェクト
- B28** 10/31 11/1・2・3 東京国際交流館(3F メインホワイエ) 10:30～17:00
学生が行うサイエンスコミュニケーションの可能性
Scientthrough(サイエンスルー)
- B29** 10/31 11/1・2・3 東京国際交流館(3F メインホワイエ) 10:30～17:00
富山大学を核とした科学コミュニケーション実践
富山大学科学コミュニケーションネットワーク・人間発達科学部科学コミュニケーション研究室

- B30** 10/31 11/1・3 東京国際交流館(3F メインホワイエ) 10:30～17:00
東京大学工学部学生が行う科学技術の魅力伝える広報活動について
東京大学工学部広報室学生アシスタント
- B32** 10/31 11/1・2・3 東京国際交流館(1F 多目的スペース) 10:30～17:00
展開するバイオメディア・アート
早大+多摩美/バイオメディアアート・プロジェクト(バイオメディアアートPJ)
- B33** 10/31 11/1・2・3 東京国際交流館(1F 多目的スペース) 10:30～17:00
カオスモス/複雑な自然現象の体験
CHAOSMOS/富岡雅寛
- B34** 10/31 11/1・2・3 東京国際交流館(3F メインホワイエ) 10:00～17:00(31日のみ11:00～)
横串フィールド
サイエンスコミュニケーションネットワーク横串会
- B35** 10/31 11/1・2・3 東京国際交流館(1F エントランスホール) 10:30～17:00
理科教育ツールとしての日本語バイオポータルサイト
国立情報学研究所 戦略研究プロジェクト創成センター
- B36** 10/31 11/1・2・3 東京国際交流館(1F エントランスホール) 10:00～17:00(31日のみ13:00～)
体内時計のリズムを光で調節～時差ボケと光治療器～
山口大学時間学研究所
- B37** 10/31 11/1・2・3 東京国際交流館(3F メインホワイエ) 10:30～17:00(31日のみ13:00～)
さりげなく科学でコミュニティづくり
ありゆうる・しあんでいふいへく
- B38** 10/31 11/1・2・3 東京国際交流館(3F メインホワイエ) 10:30～17:00(31日のみ13:00～)
サイエンスカフェポスター展2009
サイエンスカフェポスター展企画グループ2009
- B39** 10/31 東京国際交流館(1F 多目的スペース) 13:30～15:00
彩りあざやかカラフルポテトができるまで
農林水産省農林水産技術会議事務局、エム・アール・アイ リサーチアソシエイツ株式会社、株式会社三菱総合研究所
- B40** 10/31 11/1・2・3 東京国際交流館(3F メインホワイエ) 10:30～17:00(31日のみ14:00～)
川端康正通信～おもしろからの提案～
八戸工業高等専門学校 物質工学科5年 川端康正
- B44** 10/31 11/1・2・3 東京国際交流館(3F メインホワイエ) 10:30～17:00
理系女性のきらめく未来!
～ロールモデルを通してキャリアデザインを考えよう!～
独立行政法人科学技術振興機構 男女共同参画ワーキンググループ
- B45** 10/31 11/1・2・3 東京国際交流館(3F メインホワイエ) 10:30～17:00
応援します!地域に芽生えるサイエンス
～JST地域の科学会推進事業の紹介～
独立行政法人科学技術振興機構
- B52** 11/1・2 東京国際交流館(1F エントランスホール) 10:30～17:00
縄文コースターから考古学～大学は大きなミュージアム
NUMAP(ニューマップ:名古屋大学ミュージアム活性化プロジェクト)
- B53** 11/1・2・3 東京国際交流館(1F エントランスホール) 11:00～16:00
水の不思議で科学する一泡・しずく・膜・溶液の世界
埼玉県立浦和高等学校 総合科学研究部・SPP
- B54** 11/1・2・3 東京国際交流館(3F メインホワイエ) 11:00～17:00
これからの理系社会《女性の理系能力が「未来」を創る》
INWES Japan (International Network of Women Engineers and Scientists: 国際女性技術者・科学者ネットワーク日本支部)
- B58** 11/2・3 東京国際交流館(3F メインホワイエ) 10:00～17:00
☆北大CoSTEPの科学技術映像☆
北海道大学 科学技術コミュニケーション養成ユニット(CoSTEP)
- B59** 11/2・3 東京国際交流館(1F エントランスホール) 10:30～17:00
放射線を未来のために活用しよう!
放射線を未来のために活用しよう!
- B60** 11/2・3 東京国際交流館(3F メインホワイエ) 10:30～17:00
“ふくしま”の「よせ鍋サイエンス」
ふくしまサイエンスがらつとフォーム(spff)

※A34/A54/B31は出展キャンセルのためキャンセルのため欠番となります。



サイエンスアゴラ2009を終えて

サイエンスアゴラ事務局



過去3回はいずれも3日間開催でしたが、2009年は初の4日間開催に挑戦しました。新たな試みとして、日本科学未来館シンボルゾーンに総合受付とミニステージを設けたことで、科学コミュニケーション広場にふさわしい演出ができたと思います。また、大型スクリーンを使った映写会や映像メディア各社のブース展示などもありました。

2010年は、過去4回の実績を踏まえ、科学コミュニケーションのショーケースというサイエンスアゴラの原点に今一度立ち返り、密度の濃いプログラムを用意したいと思っています。

サイエンスアゴラ2010のスケジュールについては、決まり次第、下記のウェブサイトで順次お知らせしていきます。

<http://www.scienceagora.org/>



地球の未来

日本からの提案Ⅱ

独立行政法人 科学技術振興機構 (JST)
科学ネットワーク部 サイエンスアゴラ事務局

〒102-8666 東京都千代田区四番町5-3 サイエンスプラザ
TEL: 03-5214-7625 FAX: 03-5214-8088
e-mail: agora@jst.go.jp

「サイエンスアゴラ」公式ホームページ: <http://scienceagora.org/>

science agora 2009